

東日本大震災お見舞いと 北の縄文 世界遺産登録への応援メッセージ

「神戸から 日本人の心のふるさとへ」

By 三内丸山縄文発信の会会員 兵庫県神戸市 中西睦夫(67歳)

東北関東大震災の未曾有の災害に遭遇された皆様に心からお見舞い申し上げます。

かつて歩いた縄文のふるさとでの大地震に気が気ではありません。

縄文文化を育んだこのフィールドが、被災された皆様のこころを癒し、

一日も早く元気になられますことをお祈りします。

「日本人のこころを映すストーンサークル」「戦いを知らない心やさしき縄文人」に憑かれて10数年、縄文のフィールドに立つのが楽しみな縄文walkです。

縄文人は自然の恵みを受けながら素晴らしい自然の景色の中で縄文の文化を育んだ。

その景色を見るだけでもすばらしい。

この縄文ワールドを話すのに、私は「縄文帰り」という言葉をよく使う。

一歩足を踏み入れれば、そこは素晴らしい自然の景観と心の安らぐ縄文の世界。

高台に座って、ほっと一息、周りを眺める「縄文がえり」。私一番の縄文の楽しみです。

六本柱はどうやって引っ張ってきたのだろう？ 環状配石墓と墓の道に今にも声が聞こえてきそうな土偶。

ここでどんな祭りが行われたのだろうか？ 栗・どんぐりの栽培と酒造りとは？手に持った翡翠の玉のひんやりとした感触と黒曜石 そして漆。

この集落交易のルートは見晴らす森を越えて、どこまで広がっているのだろうか？ などなど.....。

また、一般の人たちに混じって「墓の道の意味を考えている」と遺跡のジオラマをじっと眺める学者さんの姿が強く印象に残っています。

発掘された遺物・遺構を前に、生き活きと語られる「縄文の暮らしと知恵」に眼を輝かせ、頭をひねり、質問し、みんなで考えた「三内丸山縄文人の生活・縄文ワールド」。市民・訪問者の参加・体験型遺跡が 三内丸山の熱気・魅力。

そんな遺跡作りへの参画が認められての文化庁長官賞表彰。おめでとう。

世界遺産登録運動のさらなるエネルギーになるでしょう。

でも、発掘が進み、遺跡の解明・整備が進むにつれ、そんな生話が聞ける機会もなくなってきました。

時遊館や収蔵庫展示室などが整備され、遺跡の見学も遺構や遺物の説明解説が中心。

「縄文人の生活」を思い浮かべての語らいの熱気が薄らいで、「ちょっと距離感が出てきたなあ」と感じています。

かつて、自分がそうであったように、眼前に広がる縄文の素晴らしいフィールドの中で、縄文人たちの生活や知恵そして不思議が語り合え、自分とのつながりが体験できる場であってほしい。

北海道・北東北の縄文遺跡群が「『心優しき縄文人』『日本のこころのふるさと縄文』を体験できる」そんな身近な故郷として世界遺産になってほしい。そんな夢を描いています。

私の住む関西では名の知れた縄文遺跡はそれほどないのですが、ここでも素晴らしい自然の景色と心安らぐ場が用意されています。関西で開催された「縄文塾」に端を発した同好の人たちのささやかな縄文勉強会が「関西に縄文の灯を」ともう6年近く続いています。北海道・北東北の縄文の世界遺産登録が さらに「現代の縄文回廊」へと全国に広がることをも期待しています。

